

⑱ 『小ぬか雨』

未明から降り始めた細かい雨がまだ続いていた。啓雲の後姿を見送り、勤行を済ませると、ミチは慌ただしく旅支度を始めた。日暮れまでに手取川の岸辺まで辿り着きたいと思つた。

急がなければならぬ特別の理由が有る訳ではない。加賀の国を目の前にして、長い間胸に抱いていた千代女への憧れが、一気に膨らんできたのだ。

せわしなく山門を抜けようとしたところで

「もし、尼様」と呼び止められた。若い修業僧だった。

「先ほど隣の部屋の床を磨いていたものですから、盗み聞きするつもりはなかったのですが、啓雲さまとのやりとりが聞こえてしまいました。申し訳ありません。路銀を渡してしまつてはこれから先がお困りでしょう。これは昨夜の残りご飯です。大急ぎで握つて来ました。とても旅の助けにはなりません、どうぞお持ちになつて下さい。」

ミチは、全く予想もしなかつた出来事に瞬間言葉が出なかつた。目を見開いて、若い僧の顔をじつとみつめていた。握り飯を渡し、庫裡の方へ遠ざかる背中に向かつて、あわてて

「ありがとうございます」と礼を言うのが精一杯だった。昨夜もそうだった。若い関守に助けられて関所を越えた。

今日も今、こうして他人様の情けを頂いている。何という幸せ者なのだろう。

庫裡に姿が隠れそうな若い僧の後姿に、もういちどおじぎをしたミチは、蓑の前をしつかりと合せ、小ぬか雨の中を加賀に向けて歩き出した。

大聖寺藩の城下を過ぎ、一里ほど歩いたところで大きな四つ辻に出た。左に七 八里進めば手取川のはず。

ためらいもなく左に曲がりかけ、念の為にと角に立つている道標に目をやると

「やまなかへ二り」と記されている。それを目にしたミチの気持ちが大きく揺れた。

芭蕉が、十日近くも逗留した山中温泉が僅か二里の所にある。

山中と云う言葉の響きから、永い間ずっと深い山の奥だろう、と勝手に想像していたが、僅か二里の寄り道なら苦にはならない。千代女が住む松任に着くのが、少し遅れるだけだ。

ミチは、来た道からそのまま真っ直ぐに四つ辻を越え、山中温泉に向かつて歩き出した。俳聖が立寄つて、しかも長逗留をした場所に自分の身を置いてみたかつた。

大聖寺川に沿って進んでゆくと、程なく人家が途切れた。

河原には猫柳が生い茂り、満開の薄黄色の花が雨粒をいただいてふくよかな膨らみを見せている。

右手は山が迫り、道沿いの灌木の若い葉はしつとりと水気を含んで、新たな芽吹き季節を謳歌しているようだ。緩い流れの水音が僅かに聞こえている。霧のような雨が降っているものの、空は乳色に潤んで風も無く穏やかだった。

とその時、ミチは視線の隅に幽かに、素早くものの動く気配を感じた。

賊か？人間らしい影が音も無く、流れの淵から猫柳の茂みに飛び込んだ気がした。

ミチを緊張が襲った。一気に、様々な考えが頭の中を巡った。

襲うつもりだろうか。例え襲われたとしても、一文も持っていない。その時、賊はどうするだろう。身ぐるみを剥がすだろうか。それとも、腹立ちまぎれに命まで取り上げるだろうか。

傘狂の家を発つ前の日、兄弟子百茶坊の家内がミチの旅支度を整えながら、懐から白い羽二重に包まれた懐剣を取り出し

「これは私が嫁入りの際に持参したものだ。女の一人旅では何が起こるか分かりません。護身のため潔斎のために役立つ立ちましよう」と言ってミチに渡そうとした。

身を護るために使い、万が一身を護れず凌辱を受けるようなことが有った時には、身を浄める為に使いなさい、と言いたかったのだ。

その時傘狂は

「菊車殿は出家の身、何事も仏の御心に従うことが肝要。例え不条理な出来事に出会ったとしても、刃物で争うことはなりませんまい。」と言って懐剣を収めさせた。

その不条理とこれから対峙しなくてはならないのか？今がその場面なのだろうか。

杖を持つ手に力が入った。だが次には、こんなに陽の高い内から賊でもあるまい、と云う考えが少しミチを冷静にさせた。

では一体何だ？けものか？それとも気の所為か？ミチは極度に緊張したまま正面を向き、視線だけを猫柳の茂みに落として通り過ぎようとした。

幾重にも重なった分厚い茂みに遮られて何も見えない。しかし、矢張り何かの気配を感じる。間違いなく何か潜んでいる。

ミチは思い切って声をかけた。

「もしや虫谷の人ではありませんか？私は啓雲様の知り合いの者です。虫谷の人なら啓雲様をご存じのはず。もしそうなら姿を見せて下さい。お話があります」

ミチは茂みの前に佇んで反応を待った。だが、茂みの奥

からは何の反応も返って来なかった。

矢張り気の所為だったのか、そう思つて歩き出そうとした次の瞬間、俄かに黒い塊が茂みから躍り出て、まるで獣のような勢いで河原を上流に向かつて走り出した。

物凄い勢いで飛び出した人影は、半町も行かない内に急に勢いを失うと、二、三步よろめいてぼろ布のように力無く河原にぐずれ落ちた。

近づくミチに視線を向けてはいるのだが、もはや起き上がる力も無くしてしまつていようだった。

「やはり虫谷の人ですね」と問いかけるミチを凝視する目には、敵意と恐怖心がない交ぜになっている。

それにしても、急に倒れ込んでしまつたのはどうしてなのだろう。

思案を巡らせながら男の脇にしゃがむと、尼の姿に安心したのか、それとも抵抗する気力さえも無くしてしまつたのか、男は力無く目を閉じた。

虫谷の人間なら人目につくのは良くない。ミチは男の片腕を肩に担ぐと、もう一方の手で腰の帯を掴んで、生い茂る猫柳の中にぼろ布の塊を引きずり込もうとした。

強烈にすえた匂いが、鼻腔をつらぬいた。

男もこのままではまずい、と思つたのだろう、両腕を支えに何とか上体をお越し、ミチに引きずられて藪の中へもぐり込んだ。

男はもう何日も食べ物をお口にしていなかった。人目につかないよう、人の往来が多い俱利伽羅峠を避け、谷を迂回する途中で仲間にはぐれた。必死で探したが、深い谷の中、しかも暗闇の中では仲間をみつけることが出来なかった。谷川の水だけが命の綱だった。

ミチが宿坊を出る時に貰つた握り飯をむさぼり食つた男は、啓雲が村の衆を助けるために虫谷に向かつて話を聞くと、やつと少し安堵の表情を浮かべた。

聞いてみたところで手出しのしようも無いことは判つていたが、ミチは恐る恐る村の様子を尋ねてみた。

「村中どこを探したつて、とつくに一粒の米も残つちやいねえ。僅かに残つている雑穀を分け合つて粥にして食つているが、椀に一つまみの粟がへえつていだけだ。それでも年貢の猶予はならねえと言う。俺たちはどうやって生きていけばいい？ それをお役人に聞きてえだ。」

男はそう答えると、急に目に一杯の涙を浮かべて

「嬬も二人の子も、いや村の者全員がこのままじゃ飢え死にする。どうせ死ぬなら直訴でも、と思つたがこのざまだ。」と言うと、膝の間に顔をうずめ、両の手で頭を抱えて嗚咽した。

「一昨年も去年も冷害で稲に実が入らなかった。シラスばっかりだ。種粃まで食つてしまつて、今年は苗代を作る粃もねえ。」

「隠し田はないのですか？」

「そんなもんがみつかった日にや命がねえ。」

どのみち命が無いのなら、と言いかけてミチは言葉を飲んだ。村の者もとつくにそんなことは考えたに違いない。それは出来ない相談なのだろう。

男は顔を上げると、涙で濡れた目をミチに向け

「明るいうちはみつからないよう隠れて、夜になったら虫谷に帰る」と言った。言いながら視線をもう一つの握り飯に落とした。

「どうぞ、みんな食べて下さい。」

「構わねえか？ だったらもらって行く。嬬と子に食わせてえだ。」

身にまとっている悪臭を放つぼろ布を、こざつぱりした古着にでも着替えさせれば、昼間怪しまれずに歩くことも出来ようが、今のミチには古着を買い与える金も無かった。目の前の難儀に手を貸すことが出来ない。ミチは耐え難い思いを抱いたまま、背中の荷物の中から、おとよに貰った干し飯の残りと、梅干しを男に渡すと

「くれぐれも気を付けて」と言つて男の傍を離れた。

啓雲が何か良い方策をみつめてくれることを祈るだけだった。

小ぬか雨はまだ降っていた。晴れやかな気持ちで山中へ向かうつもりだったミチの気持ちだが、今はどんよりと曇

っている。

男に黙礼をして浮かない気持ちの一步を、山中に向かって歩き出した。